
君の消えた空の下

裡伊佐沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の消えた空の下

【Nコード】

N6199E

【作者名】

裡伊佐沙羅

【あらすじ】

主人公は高校で知り合った谷山修二と再会する。そこで動き始めた歯車は、あらぬ方向へ二人を進めるのだった。

愛してた

ドクンドクン

心臓の音が耳にまわりつく。

ドクンドクン

規則正しくなる。

ああ。私、生きている。

さっきまでの暗い世界もうそみたい。

私はここに、存在してるよねえ？修ちゃん。

あなたは今どこにいるの？

今何してる？

もう声を聞くことも、あなたに触れることもできないんだね。

ねえ、修ちゃん。

付き合い始めたころの約束覚えてる？

私ね、最後の最後で破っちゃった。

大きな嘘をついていたの。

ねえ、修ちゃん。

あなたそれに気づいていた？

気づいてるわけないよね。

そしたら追っかけてくれてたよね。

腕をつかんで「嘘だろ？」って。

私の下手な演技にだまされるのなんて修ちゃんくらいだよ。

ありがとう。

そして・・・

さようなら

谷山修二

慣れ始めた仕事が休みの日曜日。
ちよつとばかりふらふら買い物。

久しぶりに高校生のころ通っていた喫茶店に入ってみる。

「いらつしやいませ」

決まり文句の言葉が店内からかかる。

私はそれを受け流し、適当にいすに座った。

一人だったこともあり、カウンター席だ。

「ココア」

店員に注文をする。

下を向いていた店員は顔を上げた。

「「あつ」」

声がはもったのは高校生のころの友達、谷山修二。

店員はなんと、その谷山だったのだ。

「どーも」

谷山が挨拶をするものだから私もどーもと軽く挨拶した。

「ココアだったっけ？ちよつと待ってね」

そういうと手際よくココアをカップへと注いでいく。

「どーぞ」

ぼーっと見ていた私は、はっとなりそわそわしながらカップを受け取った。

「バイト？」

私は疑問に思っていたことを聞いた。

なんとなく谷山って大学に行ってそうないメージがある。

「ううん」

だが、彼は首を振った。

じゃあここで働いてるのか？と思いつつ次の言葉を待ってみる。

「ここ、俺の家」

ああ。手伝ってことか。

一人納得しながら私はココアを一口飲む。

「どう？うまいだろ」

「うん。このココア好きなんだよね」

私はついつい笑顔になりながらそう答えた。

「このっつか俺が淹れたココアね。俺、ココア淹れるのは自信あるよ」

なんて言って谷山は二カつと笑った。

その笑顔がなんだか幼い子みたいで、なんとなく高校時代を思い出してしまう。

「その笑顔・・・」

「ん？何？」

「その笑顔・・・好きかも」

「・・・え？」

そこで私は気づいた。

なんて言ってしまったのかを。

「ごっこ、ごめん！！その・・・そういうつもりじゃ・・・」

顔を赤くして必死に否定した。

「ありがとな。うれしいよ」

谷山は動揺することなくサラっというのけた。

あ、私・・・。

好き、かも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199e/>

君の消えた空の下

2010年12月14日17時14分発行